

# パンを焦した王様

金子彦二郎

昔むかし、イギリスといふ國にアルフレッドといふ勇ましい王様がいらつしやいました。

まだ世の中が騒がしい頃のことなので、王様お自ら銀の鞍をおいた白いお馬に跨つて、あちらこちら悪者どもをイギリスの國から追拂ふ爲に出かけていらつしやいました。デンマーク人を追拂ひに出かけた或日のこと、どうした拍子か、王様の方の軍のはかりごとに手違ひが起つたため、誠に見るもあはれな負け軍となつて、澤山の家來どもは、あわてゝどこかへ逃げ落ちてしまひ、王様も頼みに思ふ馬は傷づいて斃れてしまふといふ有様なので、ほんとに命からかゝ、すつかり身なりを

おかへになつて、はふぐの體で、足のつゞく限り森の深い山の中へと逃げこんでしまひました。

風にさゝやく薄の穂にも、もしや伏兵が居たのではないかとびつくりしたり、お自分の足音にさへ追手の武者かと肝を冷して振り向いたりしながらやつと森の茂みの中に休らふべき場所を見出で、ほつと安堵の息をつきました。今日の戰場からどれ位離れたところか、王様にはわかりませんでした。少し落ちついてから、王様はあたりの様子を眺めながら、細い低い聲でこんな獨言をしていらつしやいました。

おおう。こゝは一體どこの何といふ處か知らな

いが、いやどうも目に映るもの、耳に訪づれるもの、凡てが、如何にも世ばなれのしたひつそり閑とした處ぢやわい。川は黙りこくつて流れてゐる。その清い川水がぐるりとこの邊を取圍んでゐてくれるかへ。朕も安心ぢや。それから十重二十重に絡み合つてゐる叢林は、又丁度鐵條網のやうによく朕の身を守つてゐてくれる。

いかな鬼のやうなデンマーク人でもまさかこんな奥深い隠れがまでは目が届くまい。こゝならもう大丈夫、敵の追手などに見出される氣遣なしぢや。だが併し、やはり此の近所に百姓家の一軒もあつてくれなくちや困るな。さうでないと、やつと敵の白刃の下は逃れたものゝ、今度は空腹といふ大敵の爲にいちめ殺されねばならぬ。あゝあ、この世に神様も佛様もいらつしやらないのかしら。どうしたらよからう。……おやく／＼、氣のせい、其の邊に人家でもあ

りさうな。その叢に人の通路らしいものがついてゐるやうだ。さうしてどうやらあちらの方に薄白く立のぼる煙らしいものも見えるだ。いつまでこゝにかうして居たからつて、仕方もない。どりやもう少しその邊をぶらついて見るとしよう。

かう言つて、王様は疲れた重い／＼足をさすりながら立上つて歩き出しました。

## 二

氣のせいかと思ひながらも辿つて住つたのは、紛れもない人の行き交ふ道でありました。だんだんとたづねて行つた行手には、水車小屋かとも思はれるやうな見すばらしい一軒家がありました。「やれうれしや」とたどりつくすぐ手前で、人の好さうな老人に出會ひました。王様は丁寧に辭儀をして、

「もしお爺さん、甚だだしぬけに失禮な御無心

ながら、山路に迷うて困りあぐねてゐる獵師ですが、どうぞお前さんの家へ一晚泊めてやつて下さいな。」

「何ですつて？ 泊めてくれつて？ いやこの頃のお客が多いにや呆れてしまふ。来る人々皆一々さうもてなしてゐては、身上も寵もたまつたものぢやねえや。だがまあともかくお入りなせえ。家内と相談したらどうにかなるべえ。」かういつて先に立つて薄暗い穴蔵のやうな家に入つて往つた。お爺さんは、

「おい、これ、今戻つたよ。今日は一日中煙草一服吸はずに木を樵つたもんだから、いやもうお腹はへとくになるし、疲れてぐたくくなるし……。」

と、かういひながら、内儀さんに話しかけました。が内儀さんはお爺さんの方も振り向うとせず、

「これく、お前さんといふ人は、いつもく夕飯ばかり急ぎ立てなさるが、生憎と今日はまだ出来たぢませんよ。パンがおいしく焼けるまでにはかれこれもう小一時間もかゝるし……だつてお前さん、またお天道様が裏の木小屋のうしろへ左様ならもしないんだもの……」

と言ひながら、まだ誰かがゐるやうな人の氣配にひよいと入口の方を見返ると、そこに見知らぬ人影があるので、

「そりやさうと、又、誰かを引つ張つて來たね。」

といふ。かう言はれて、少々出後れ氣味の王様はお爺さんの紹介するのも待たないで、

「いや、お母さん？ これはくお初にお目もじ致します。朕は他國の者だが無駄ながら、暫く此所に休息させて戴きたいね。それから誠に申兼ねるが、お情けで一飯振舞つていただきた

いもんで……。

と言ひました。内儀さんは一寸ふくれて見せて、

「いやだねえ、此の人は、お母さんなんて言つてさ。憚り様ながら、斯う見えても、まだ子供を生んだ覚えはないのですよ。『お内儀さん、どうぞ御無心!』とかう言ひ直しなさい。すなはにさう言ひや、うんと待遇してやりますよ。だ  
が待つたく、お前さんは今他國者だといつたね、私は他國者の世話はしないことにしてゐるんだよ。なにも他國者なんか目をかけてやるいはれが無いからさ。あの獸のやうな他國の奴ばらが入り込んで來てからといふものは、このイギリスの國には、一日だつてゆつたりと遊び樂める日がなくなつてしまつたんだもの。」  
「いやこれはあやまつたく、この土地の人達とは全く見知りのない他國者だといつたので、憚りながら朕だつて生えぬきのイギリスツ子な

んだよ。」

かう改めて言ひ直すと、百姓は膝を乗り出して、

「それぢやお前さんもやつぱり、あの私達の村をやさき、家畜や穀物をひつたくるあの沒義道なデンマーク人が悪くて堪らない仲間かね。」  
と言ふ。すると王様は急に顔をあげてひどく興奮して、

「憎いの、憎くないのどころか。實以て憎みてもなほ餘りある犬畜生とはあのデンマーク人のことよ。」

と如何にも憎々しげに言ひ放つたので、この只ならぬ氣色を見まもつてゐた内儀さんは、お爺さんの方を顧みて、

「これお前さんや、あの人は本氣で憤慨してゐるんでせうかね。何だかあんまり芝居じみてゐて、ちと變だはねえ。」

と言ひ終るのを待たずに、疑られたのが残念で堪

らないといふやうに、王様は目をいからせて内儀さんの顔をにらみつけて、

「何だど。もう一度言つて見よ。かりにもこの朕の言葉を疑ふなどいふ無禮なことをぬかすと其の分にはさし措かんぞ。」

といきまいて怒鳴りつけました。

この見幕にすつかり疑ひの雲を晴らしたお爺さんは、王様をなだめるやうに

「いや、心底しかと見届けました。お前さんはたしかに生粹のイギリスつ子に違ひない。さあ握手をさせよう。」

といつて近寄りながら、後を振り返つて、

「これくちと氣をつけて口を利くもんだ。

こんな真正銘な愛國者を見損ふなんて、罰があたるぞ。」

と言つたので、さきに路に迷うた獵師だといつはつてゐた王様は、更にこんなことを言ひました。

「實はな、かう見えても朕はアルフレッド大王様のお供をして最後まで踏留つて奮戦した者だよ。」

「ひえつつ！お前さんは、あの、國王様と御一緒に……あゝ、神よ、我等の尊崇する國王様の上に輝ける武運を授け給へ……そりやさうと誠に心もとないのは、あのお情深い我等の國王様の御身の上だ。其の後の御模様はどんな工合でせうか、早くきかせて下さい。」

「それちや、本當にお前達も國王様にお最負申し上げてゐるのか。」

「お前達も……とは、へん、面白くねえ。貧しい暮しこそしては居りますが、これでも心のありつたけを捧げて國王様をお慕ひ申してゐるんですよ。だから毎晩く豺や狼のやうなデマークの奴原を一人餘さず討ち取つて下さるやうにと、夜の目も寝ずにお祈りをしてゐるんです。」

よ。それなのに、噂によれば、どうやら今度の戦は不首尾らしいとかで、ほんとに気が氣で無えんですよ。」

「中々熱心な國王様最負だな。國王様がお聞きになつたらさぞお喜びであらうよ。」

「そんなことはどうでもいいが、國王様の御行先きは？」

「いやもう散々なことで。世間の取沙汰ぢや何でもその國王様は戦死なされたらしいとか。」

「ええつ！御戦死!!!あゝ、世は闇ぢや。神様はどうなすつたんだらう……まあく〜とにかく、

もつとこつちへ來なせえ。黒バンでも御馳走しませう。空腹かゝへたお前さんにや、香物も刺

身ぐらゐにおいしからうから。」

かういつて親切に奥へ導き入れると内儀さんも言葉をかけて、

「さあ、遠慮は無用、お前さんもつとこつちへ

來なさるがいに。國王様なみに歓迎してあげますよ。」

かういつた内儀さんは、お爺さんに賛成を求めやうなそぶりをしながら、かういひました。

「ちよいと、お前さんや、私どもはかうして此のお客さんを出來るだけでもなしてあげるからお客さんの方も少しは自分の食ひ扶持のつもりで少しは働いてくれてもいいと思ふはね。見れば體格も立派な上にどうやら如何にも器用さうにも見えるから。」

「うむ、さうともく〜。」

とうなづいて見せたお爺さんは、王様の方を向いて、

「時に客人、お前さんの得意藝は何かね。」

と問ひかけました。生れてから仕事らしい仕事といふものを教はつたこともなければ、させられた事もない王様は、この突然な質問にすつかり面喰

ひましたが、併しさりげなき體にもてなして、

「うむ、これは抜かつてゐた。朕にさせてよいことがあるなら、何でも喜んで手傳ひませうよ、バン代だけの仕事を承つておくと朕も大いに氣安くてよいことだ。」

と答へました、

## 三

「はて、何仕事がよからうかね。背戸へ出て粗朶でも一つ奇麗に結はへて貰ふかね。」

「まことにお恥しい話だが、其の粗朶しばらくといふ事だけは、生れてからやつて見たことがないんで。」

「ちや屋根を葺いて貰はうかね。この間の嵐で牛小屋の屋根が少し吹き捲られてあるんだが……。」

「残念ながら、そいつもどうも……。」

そこへ内儀さんが口を挟んで、夫に耳うちして、

「それちやどうだねお前さん、お客さんに『燈心草で籠が編めるか』つて、聞いてごらんな。」

丁度籠が無くて困つてゐる處なんだから。」

この私話をきつけた王様は、益々當惑らしい顔をして、

「そいつも、一向やつたことが無いんで……。」

と言ひ苦くさうに斷る。とお爺さんは

「では、乾草を鳩に積むことは？」

「いや、それも……。」

何一つ引きうけようとしない其の返答にちと腹立ち氣味になつたお爺さんは、最後に嘲るやうに、

「いや、何といふ呆れた能なし猿なんだらう。」

見れば人並に五本指の揃つた、而も大きな二本の手を持つてはゐるやうだが……これこれ、何か臺所仕事でもさせてやりな。いくら何でも火を焚くことや、調理臺の上を磨く事ぐらゐは出来るだらうから。」

「さうね。それちや此の焼きかけの食パンを見て居て貰ひませうかね。私は一寸牛の乳を搾りに出て來なければならぬから。」

「それがよからう。どりや俺も粗朶でも束ねて來よう。まだ夕飯にもちと間もあるやうだから。」

お爺さんから知慧をつけられた内儀さんは、

「これお客様、よく番をしてゐて下さいよ。パンを黒焦げにしちやいけねえだよ。焦げねえうちにちよい／＼反してね。」

と言ひつけました。王様が、これは斷ることも出來ませんから、

「お指圖萬々承知しました。」

と答へると、内儀さんもお爺さんも戸外へ出て行きました。

#### 四

後には王様唯一人、移れば變る世の習とはいひ

ながら、餘りの我が身の現在のあさましさに、心は千々に思ひ亂れてゐるので、あんなにこま／＼と注意されたパン焼のこともすつかり忘れてしまつて、うちうなだれた頭は、動かうともしない。幾たびか深い長い溜息をついてから、こんなひとり言をしてゐるのでした。

——あ——あ、朕一人に降りかゝつた不幸なら、そりやどんなにも我慢が出來よう。だがこの大英國の土をば朱の血に塗れさせてゐることを思ふと、あまりの濟まなさから、朕の身も心も一寸だめし五分だめしに逢つてゐるやうに辛い。戰場には朕の爲に命を投げ出してくれた忠實勇敢な將卒の屍散らばつてゐて目もあてられない光景が描き出される。あゝそれからあはれな人民たちは、或は虐殺の苦を受け、或は温かい家庭から驅り出され、或は虎の子のやうにしてゐた財物を奪はれて生きてゐる望みを



失つて、たゞうろ／＼とあわて惑うてゐる。其の悲惨な有様を現に目の前に見てゐながら、天帝の思召を承つて君臨してゐる朕として、それらを塗炭水火の苦みの中から救ひ出すこともならず、見す／＼見殺しにしてゐるとは、何といふ腑甲斐のないことであらう。おゝ、天に在します神よ、もしも微力な朕に、あの残忍兇惡なデンマーク人の爪牙のもとから、この大英國を救ひ出すだけの器量がございませんならば、朕の代りに、もつと／＼雄才大略のある豪傑をこの世にお降し下さい。さうして意氣地なしの朕のやうな者は一生この浮世離れた山の中の堀立小屋の中で、奴僕としてこき使はれさせて下さい。此の大英國の運さへ開けていくならば、朕は肥料汲みでも、犬殺しでも喜んで致します……おやつ！ 樸訥な亭主と内儀さんが歸つて

來たやうだぞ。

この時、入口から入つて來た内儀さんは、後の老爺さんを省みて、

「ちよいと、お前さんや。手を貸しておくんないよ、今牛乳桶を卸すから。や、どつこいしよ、此の搾り立ての牛乳と、あの焼き立てのパンさへありや、百味の飲食よりおいしい御飯が戴けるんよ。」

と言ひながら、爐の方を見るや否や、頓狂な聲を出して、

「やつ！ 南無三寶、いやに燻ぶると思つたら、折角のパンが燃えてしまつて、靴の皮のやうに眞黒けぢやねえか。一度も反さなかつたんだね此の馬鹿野郎！ 案山子奴、抜作めが……。」

と、頭の上でが／＼怒鳴りつけられて、ハツと我に返つた王様は、此の時やつとパン焼をいひつかつてゐたことに氣がつき、どきまぎして

「や、やつ！ これは御内儀、申譯次第もござら

ぬ。あまり躬の不仕合せ臍甲斐なさにくよくよ思ひ入つてゐた爲に、折角のお依頼もつい打ち忘れて……」

と、ひたすら低頭平身して詫び入つてゐるしをらしさに、諦めの好いお爺さんの方は、もう何もかも忘れたやうな調子で、内儀さんに向つて、

「おい／＼、何だねその膨れ面は、餌でも食べ損ねた河豚かぶらがなんぞのやうに、見つともねえからもう止さんか。それ位のことなんか、糟も残さず燃えて仕舞つたパンのやうに煙にして忘れつちまへ。客人はきつと嬉しい懐かしい思ひ出に耽つてゐて忘れちまつたのに違ひねえよ。ついなひだお前にだつてあつた事ぢやねえか、勤忍は無事長久の基、怒りは敵と思へぢや、さあ／＼機嫌を直した／＼。」

「これ／＼お前さん、何をさう一人でべら／＼御詫を並べてゐるんだね。もうい／＼加減にお止

しなせえよ、ほんに男つてものは仕方のねえものだ。」

かういつてやつと機嫌を直した内儀さんは、

「出来たことは仕方がねえ。牛乳の方でも澤山呑んで腹を塞げるだ。まあとにかく夕飯にしよう。」

といつて用意を整へる。餓ゑた口にまづいものなし。王はやつと蘇生つたやうな思ひをしてかういつた。

「いや、どうも、この見たゞけでも氣持のよい搾り立ての牛乳のお蔭で、焦げたパンの味さへも格別。」

といつて寝めると、い／＼氣なお爺さんは、

「さあ／＼、客人、どうぞ遠慮なしにどし／＼取込んでおくんなせえ。」

といつてから、内儀さんの方を顧みて小聲に

「それはさうと、お客様は、どこの間にお寝か

せするかな。」

と言ふと、もう機嫌の直つた内儀さんは笑ひ崩れて、

「ホホ……『とこの間』とは好く出来たね。居間とも寢室とも、たつた一つしか間を持たない癖に。だが裏の納屋には新しい藁があるから、あの上にも……」

と言つた。今は何事にも不足を言ふまいと決心してゐた王様も『納屋の藁の上に』と聞いて、今更ながら身の不遇を歎じ、誰にいふともなく小聲に「國王らしい寢床でなくても、せめて兵卒らしい寢床に寝たいな。……いや／＼こんなことは思ふだけでも相濟まぬ。朕につき従つてゐた數多の將卒たちは野天の下に、露の臥床に暖い夢さへ結びかねてゐるだらうのに……」

### 五

王様がこんなことを考へながら、黙りこくつて

ゐる時、戸外では何事が起つたのか、この閑静な森の中に、人や馬のさわめきらしいものが聞えて来る。早速それを聞きつけた内儀さんは、お爺さんに、

「何でせう、今頃ざわ／＼物騒しい音がしますね。あゝ分つた。ありやたしかに馬の蹄の音だ、もし、お前さんや、何事がおつぱじまつたのか一寸様子を見て来ておくれよ。」

聲に應じてお爺さんがあたりの小屋を見廻りに出掛けていつたが、やがて立戻つて來た時には、其のうしろに拔身を提げた嚴めしい軍人を従へてゐた、するとてつきりそれがあの慘虐なデンマークの兵隊に違ひないと思ひ込んだ内儀さんはもうがた／＼ふるひをしながら。

「ひやつ！拔身々々」

と言つて震ひ上つてゐる。お爺さんも、

「デ、デンマークの兵隊様々々、どうぞ命ばかり

はお助け……」

と顔色をかへてひたすらに頼み入れてゐる。が、そんな泣き言には耳も藉さず目もくれなかつた件の軍人は、この家の中に入つて来て、ふとそこになだれてゐたパン焼の番さへ出来ない能無しの馬鹿野郎の姿を認めるや否や、ハツと其の人の足許に跪いて、

「アツ、陛下よ、國王様よ大王様よ、さてはかやうないぶせき處にお忍びでござりましたか。

でもまあ御無事で……」

と涙を流して歎びの言葉を投げるのであつた。

この思ひがけない外來者の喜びの叫びでふと頭をあげた王様は、地獄で佛に逢つた亡者の心もかくやと思はれる許りの表情を顔に湛へ、その軍人の肩に手を載せて、

「お、誰かと思つたら、忠勇無双なエルラか、よくも尋ね當てゝくれた。嬉しく思ふぞ。」

と答へたのであつた。これこそ王様の侍従、武官のエルラであつたのだ。

「お、陛下よ、小臣はお目出度いお便りを聞え上げに参りました。」

「なに？ 目出度い便り？」

「其のお驚きは御尤もでございます。實はあのキンウイス城塞に包圍されてゐた我軍が、最後の非常手段として死物狂の突撃を敢行したのでござります。所で、邪は遂に正には勝つことが出来ず、デンマーク軍はこの決死隊の爲に滅茶く斬りまくられました、さしも暴戻を極めた敵軍もあの廣い野邊の緑を朱に染めて全滅の體たらく……」

「ホホウ、エルラよ、そりや一體眞實か。」

「決して御懸念には及びませぬ。デンマーク軍の中心目標である軍旗さへ奪ひ取りましてござります。今や敵軍はすつかり度肝を抜かれて

再び抵抗ふ氣勢もござりませぬ。凱歌をあげた我がイギリス軍は滿腔の誠意と喜びとを以て陛下の御歸還を待ちあぐねて居ります。詳しいことは此の書而で。」

といつて恭しく書面を捧呈しました。

六

さつきからこの問答を聞いて、七面鳥のやうに顔色を換へ、身の置き處もないやうにおどおどしてゐた老爺さんは誰にいふとなく、

「や、や、これや飛んでもねえことになつたぞ……これ噂よ、手前はまあ取返しのかねえ悪口を叩いてしまやがつたぞ。」

と怨めしげに言ひかけました。かう言はれぬさきから、もう身も世もなくぶる／＼振ひつゞけてゐた内儀さんは、泣聲出して、

「あゝ、これお前さんや、どうしませう。私等はもう絞り首にきまつた。だが驚いたね。あれ

が國王様でいらつしやらうとは……」

「なあ、噂よ、あの俺等のやうな下司のするやうな仕事のどれ一つも出来ねえと聞いたとき、直ぐ國王様と感づける筈であつたになア。今更仕方がねえが……」

この時王様はすつくと立上つて、

「誠に目出度いしらせであるぞ。輝ける希望が絶望の淵のどん底から飛び出して來たのだ。よし！ 朕は金の鎧に身を固め、白馬に跨つて、我が勇敢なイギリス軍の先頭に立つて戦ひ、我が軍に最後の勝利の榮冠を贏ち得させずには措かぬぞ！」

「嬉しき仰せを承ります。もはや此の世に在さぬとまで傳へられた陛下が、再び起つて武裝を召されたと聞きましたら、あちらこちらに身をひそめて居ります武人どもが、西から東から群つて來て、以前にも増した氣勢をあげうる

ことは必定にござりまする。」

「一刻も早くそれらの者共に逢ひたいことぢや  
さうして戦場の露と消えた多くの臣下の爲に弔  
合戦をしなくては……。」

この時、お爺さんと内儀さんとは、王様の足許に  
ひれ伏して、

おゝ我が國王様よ！

あゝ我が陛下よ！

「どうぞ、お情けある御處刑を！」

「陛下が、俺の家内の悪口雑言をお許し下され  
さへすれば、もう何も思ひおくことはございま  
せん。かはいさうに、彼女は別段わる氣があつ  
て申した譯ぢやございませぬのですから。」と口  
々に泣きわめきながら、お詫びしましたが、そこ  
は苦勞人で情深い王様のことですから、やさしい  
おだやかな口調で、

「心配するな、殊勝な者共。許してつかはすば

かりか、朕の方からお禮を言ふぞよ。そちち  
は、朕の最も困つてゐる處を助けてくれた、謂  
はゞ命の親である。朕が再び此のイギリスの王  
位に即く時が來たなら、よくもこの朕をもてな  
してくれたそちたちの好意に對して、厚く褒美  
の品を取らせるであらうぞ。」

と、忝くも有難いお言葉を賜つてから、

「いざ、忠勇無双なエルラよ、さらば出陣の用  
意！」

と武者振り勇しく、この伏屋から御出發になりま  
したとさ。

